農林水産大臣賞受賞

地域の宝でむらおこし
～若い力で未来へ残す「棚田」のある生活を～

受賞者 特定非営利活動法人せんがまち棚田倶楽部

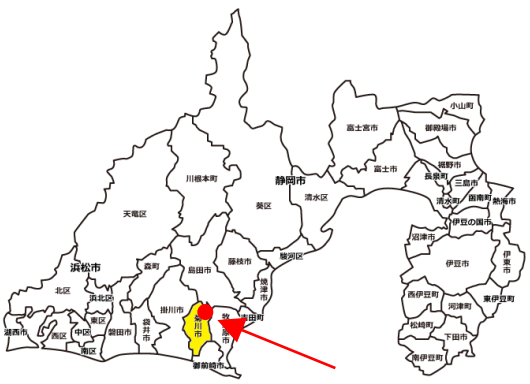
（静岡県菊川市）

■　地域の沿革と概要

菊川市は、静岡県の西部に位置し、市のほぼ中央を一級河川「菊川」が南北に流れている。市の総面積は94.19㎢で、古くから遠州と信州を結ぶ「塩の道」など、交通の要所として栄えてきたまちである。近年は東名菊川インターチェンジ周辺の区画整理事業により新たな商業区域が形成され、商業のまちとして発展を続けている。

農業については、温暖な気候と地理的条件に恵まれ、茶を中心に水稲や施設園芸などの生産が展開されている。市北東部には、「日本一の大茶園」牧之原台地が広がり、基幹作物である茶は県内においても屈指の栽培面積を誇り全国的にも茶産地として名声を発している。また、市南部では、大規模に整備された水田において、営農集団などによる効率的な水稲栽培をはじめ、茶、レタス、メロンなど多品目の農業が行われている。

第１図　位置図



第１表　地区の概要

事　項	内　容	
地区の規模	集落	
地区の性格	機能的な集団等	
農 家 率 （内訳）		12.0%
	総世帯数	16,095戸
	総農家数	1,930戸
専兼別農家数 （内訳）	専業農家	360戸
	1種兼業農家	241戸
	2種兼業農家	704戸
農用地の状況 （内訳）	総土地面積	9,419ha
	耕地面積	2,245ha
	田	854ha
	畑	1,390ha
	耕地率	23.8%
	農家一戸当たり耕地面積	1.2ha

注：市全体の数値（H27）
専兼別農家数は販売農家数の内数のため、総農家数と一致しない。

■　むらづくりの概要

１．地区の特色

上倉沢地区は、市北東部の「日

本一の大茶園」である牧之原台地に隣接する平場農業地域で約 180 人が生活しており、東名高速道利用により都心や名古屋方面からのアクセスも良好な地域である。牧之原台地西側に残る棚田を、地元では千框（せんがまち）と呼んでおり、開墾の始まりはおよそ 400 年前の戦国時代からと目されている。最盛期の昭和 40 年頃には、耕作面積が 10.1ha、3,000 枚以上の棚田で年間５百俵余の米を生産していた。

また、本地域は日本有数の茶園でもあり、茶園の畝間（うねま）にススキやササを主とする刈敷きを行う伝統的農法「静岡の茶草場（ちゃくさば）農法」は、平成 25 年に菊川市のほか掛川市、島田市など５市町と共に世界農業遺産に登録されており、多くの農家が「静岡の茶草場農法」の認定農家となっている。

このように、歴史と農業を通じて維持された景観や文化的な資源を有している地区である。

２．むらづくりの基本的特徴

（１）むらづくりの動機、背景

上倉沢地区の住人にとって、千框の棚田は地域生活に不可欠であると同時に、シンボル的存在であった。

美しいモザイク模様を形成し「メロンの皮のよう」と表現された棚田は、1 枚 1 枚の面積が小さく生産効率が元より悪いうえ、農作業の機械化・省力化に適応し難く、米価の低迷などの悪条件も重なる中で後継する者がいなくなり、その数が激減していったため、元号が平成へと変わる頃には、最盛期の１割ほどにまで耕作面積は落ち込み、棚田消滅と同時に、地域としても活力を失うことが危惧される状況に陥った。

このような状況の中、当時青壮年部の代表であり地域のリーダーでもあった山本　哲氏は『400 年続いた棚田の歴史を自分たちの時代で無くして良いのか』『自分たちが幼いころに遊んだ自然溢れる棚田を自分たちの子供たちにも見せたい』との思いから、平成６年に同氏が中心となり地元有志をメンバーとして「千枚田を考える会」を立ち上げた。

写真１　荒廃が進んだ棚田

写真２　再生された棚田

棚田の再生に向けた活動は、当初では少数の地元農家の青年達のみで行っていたが、その後、この活動が認められ平成 11 年に静岡県の「棚田等十選」に認定された。このことにより市内外の注目が集まり、多くのボランティアが棚田に訪れるようになり、これを契機に会の名称を「上倉沢棚田保全推進委員会」に変

更し、ボランティアの力を借りながら棚田の再生に向けて取り組み、かつての美しい棚田景観と豊かな自然環境を少しずつ取り戻してきた。

さらには､｢千框｣の美しい景観と豊かな生態系を未来に残すことを掲げ、今後の活動を継続させるために法人化を図り、平成 22 年に「特定非営利活動法人せんがまち棚田倶楽部」(以下「棚田倶楽部」と表記する。)を設立、同時に「棚田オーナー制度」を導入するなど、本格的な棚田保全活動を開始した。

（２）むらづくりの推進体制

棚田倶楽部では、棚田を媒体として地域内外の団体等と連携することによりむらづくり活動に取り組んでいる。

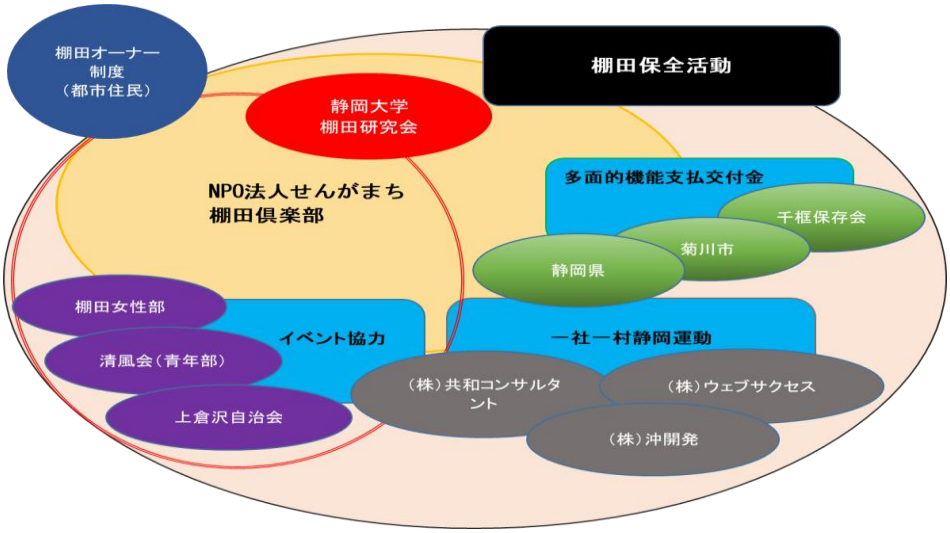
ア　当該集団の組織体制

・名　称：せんがまち棚田倶楽部
・設　立：平成 22 年２月
・会員数：22 名（令和２年４月時点）
・役員数：７名

イ　当該集団と連携してむらづくりを行う他の組織、団体との関係及行政との関係

関係する地域の組織は、行政機関として静岡県及び菊川市、関連団体として地元団体の棚田女性部、清風会（青年部）、上倉沢自治会、また静岡大学棚田研究会とも連携している。更には、静岡県の取組である「一社一村静岡運動」により提携した一般企業３社とも連携して活動を進めている。

第２図　むらづくり推進体制図



■　むらづくりの特色と優秀性

１．むらづくりの性格

本地域における最大の地域資源である棚田を復田させるため、地域住民の労力と併せて静岡大学の学生、ボランティアや棚田オーナー、一社一村運動により提携した企業等との協同活動に取り組み、この活動を通じて生まれた都市区域に住む若い人との交流は、地域住民が見過ごしていた地域資源の再確認へ導くとともに、本地域に「人の賑わい」をもたらしている。

２．農業生産面における特徴

（１）棚田米の生産・販売

現在、再生された約３ha の棚田は、約半分を棚田倶楽部が管理、残り半分をオーナー田としている。棚田での水稲栽培は機械化や省力化に向かず生産性には限りがあるが、できるだけ農薬は使わず、有機肥料を用いた栽培を行い、環境にも配慮した米であることをセールスポイントとし、特別な棚田米「菊川市上倉沢　せんがまちの棚田米」として主にインターネットやイベントにおいて高価格で販売している。パッケージデザインは、連携する企業によるもので、イメージアップにもつながっている。生産量は年によってばらつきがあり、令和元年産は病害虫の被害が多く 340kg の販売にとどまった。収益は、イベントの運営費用に充てられる。なお、オーナー田においては 15kg をオーナーに送っている。

（２）地域農産物の消費拡大

棚田倶楽部の活動が活発となることで、棚田でのイベント実施の際に併せて開設する「棚田市場」では、棚田米と共に、地元農家の主幹作物であり世界農業遺産特産物認定の「静岡の茶草場農法」で栽培された茶や地元で採れた野菜の販売のほか、前述の茶葉を用いた体験型イベントの実施により、近年茶価が低迷する中で農家収入の一助となっているだけでなく、地元農産物のアピールの場としても貢献している。

なお、棚田市場では、棚田女性部会員が対面販売を行っており、地場農産物の特徴、取り扱いのコツやお勧めの調理法を熟知していることから、その知識を活用し販売での主力となっている。

写真３　棚田市場

（３）生産力向上、生産・流通基盤の維持

棚田倶楽部では、千框保存会と連携して多面的機能支払交付金を活用し、地域内の農道及び水路の維持・保全、棚田及び茶園の整備による農村環境保全を行っている。また、連携する企業より、農道や用水路等の施設保

全作業時の重機利用の協力、更に学生の協力を得て農地・生産基盤の維持を図っている。

（４）農家の経営改善への貢献、若者による活動の参画

棚田倶楽部メンバー22名のうち15名がお茶生産農家であり、この15名全員が世界農業遺産「静岡の茶草場農法」認定農家である。棚田倶楽部が開催するイベントにおいて、世界農業遺産認定農法のお茶であることをＰＲし、その他農産物も含めた販売により農家の経営改善に貢献している。

写真４　世界農業遺産認定表と茶草場農法農家認定マーク

また、棚田倶楽部の活動において、地域女性や大学生らボランティアの若者の参加は増加（H22：85名→R1：512名）しており、将来への活動継続を視野に入れ積極的に取り組んでいる。

３．生活・環境整備面における特徴

（１）「地域資源」を活用した都市住民との交流

本地域における最大の地域資源は千枚の棚田であり、伝統的な農業、美しい景観などを活用した都市住民との交流は、すべてこの棚田を媒体とするものである。

棚田倶楽部では、法人化と同時に棚田オーナー制度を導入し、年間約50組（県内約８割、東京、神奈川など４都県が約２割）を受け入れている。棚田保全活動を実施するに当たり、静岡大学棚田研究会の大学生や、子育て世代が多く若い棚田オーナーとの間で行われる交流は、高齢化が進む地域の中で、新たな活力を生んでいる。

写真５　棚田オーナーによる稲刈り

開催するイベントは、棚田での田植え、稲刈りや同時に開催される「棚田市場」のほか、棚田がもたらす豊かな生態系を活用した「夏休み生き物教室」、「そば打ち体験」や「しめ縄づくり体験」等がある。

また、一般企業の研修の場や旅行会社の農業体験ツアーの会場としても棚田の活用を図っている。

これらの棚田を活用したイベント等の取組は、令和元年度で25回実施され、交流人口は合計2,700名を超えている。

（２）地域における啓発活動

棚田倶楽部の役員による地元小中学校への出前授業も行っている。小中学校の総合学習として棚田と周辺の茶草場を訪れ、貴重な生き物と直接触れる体験学習を行うほか、田植え、稲刈り体験だけでなく、棚田の歴史や果たす役割など、棚田と茶草場の大切さを伝える学習も行っている。

写真６　出前授業

（３）女性の社会参画

棚田倶楽部と連携している地元の団体として「棚田女性部」があり、現在 25 名で活動している。田植えや稲刈り等の際は、棚田米や地域食材を使った弁当を 200 食程度提供しているほか、イベント時の接客や販売の主力を担っており、来訪者との交流には貴重な存在となっている。